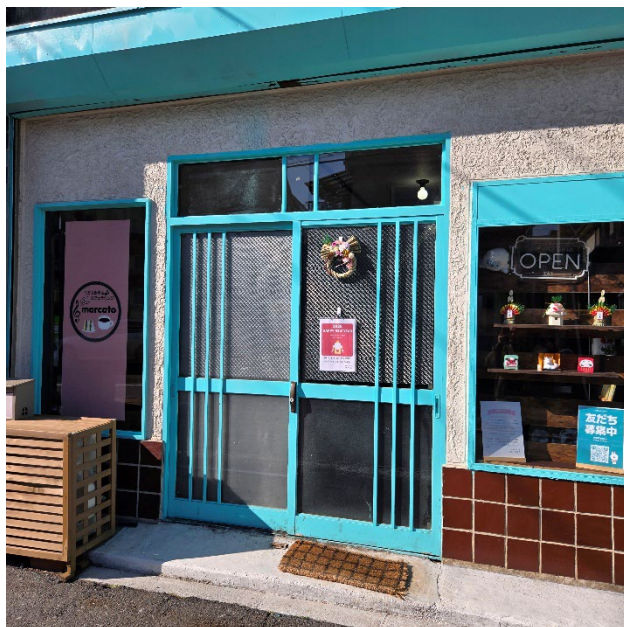


支えられる側から、支える側へ

— 常設型居場所「子どもカフェラウンジ マルカート」に
おける、子ども・高校生・地域をつなぐ支援の循環構造 —



団体名（登記前）：任意団体 未来への一皿

※2026 年 4 月 1 日 特定非営利活動法人 未来への一皿 設立予定

事業名 子どもカフェラウンジ マルカート運営事業
（常設型子どもの居場所・子ども食堂の運営）

※子ども食堂&カフェラウンジ「マルカート～未来への一皿」
を特定非営利活動法人化とともに改名予定

執筆者 代表（代表理事予定）石田 直樹

作成年月 令和 8 年 2 月 12 日



目次

要旨	3	
第1章 実践に至る背景		
― 校内個別支援室での経験と、卒業後の「空白」への応答 ―	4	
第2章 事業設計に込めた思想		
― 「支援をする場」ではなく、「生き続けられる日常」をつくる ―	5	
第3章 実践の中で見えてきた原理		
― 高校生を媒介として、支援が循環し始める理由 ―	6	
＜図 子どもカフェラウンジ マルカートにおける支援の循環構造＞		
第4章 事業の実施を通して見えてきた変化		
― 子ども・若者・地域の日常に起きていたこと ―	8	
第5章 実践を通して浮かび上がった課題と対応		
― 支援の循環を保つために重ねてきた判断 ―	12	
第6章 事業の社会的意義と公共性		
― 制度の外に置かれた「日常」が地域にもたらしたもの ―	13	
＜グラフ：2025年度1月末までの収支報告＞		
第7章 地域実践と政策のあいだで		17
― 本事業が置かれている位置について ―		
第8章 今後の課題と事業の展望		
― 「広げる」のではなく、「続ける」ための選択 ―	19	
第9章 おわりに		
― 支えられる経験が、次の支援を生むために ―	20	

【巻末】あとがき（自評）

【資料】＜後援・連携・助成・登録 一覧＞

要旨

本報告は、相模原市中央区において任意団体として実施された子どもカフェラウンジ マルカートの令和7年度の実践を整理し、食を起点とした常設型居場所が、思春期の子ども・若者および地域にどのような変化をもたらしたのかを明らかにするものである。

本事業の出発点には、校内個別支援室の担当教員として、学校に来づらい生徒と日常的に向き合ってきた経験がある。学校という制度の中では、関われる期間が中学3年間に限られ、卒業と同時に関係が断たれてしまう。また、学びや進路には関わられても、生活そのものに継続的に寄り添うことは難しい。そうした中で、生徒自身から語られた「中学卒業後も行ける居場所をつくりたい」という声を受け止め、学校の外に、評価や役割を求められずに存在できる日常の場を地域につくることを目的として、本事業は構想された。

子どもカフェラウンジ マルカートは、平日毎日7時30分から19時30分まで開設され、朝食から夕食までを含む生活時間帯に寄り添う常設型の居場所である。対象は、小学校5年生以上から高校卒業相当年齢までの思春期世代とし、参加理由や利用頻度を問わず、来た子どもが自分のペースで過ごせることを重視して運営してきた。食事を事業の中心に据えることで、説明や同意を必要としない自然な関係性が生まれ、支援が特別な行為として意識されにくい環境を形成している。

令和7年度の実践を通して確認された最大の特徴は、高校生世代が支援を受ける側から、自然に場を支える側へと移行していく循環が日常の中で生じた点である。高校生を担い手として制度的に位置づけることは行っていないが、安心して過ごせる日常が先に存在したことで、調理補助や配膳、年下の子どもへの声かけなどが自発的に立ち上がっていった。この循環は指導や育成の成果ではなく、評価や役割を求めない場を継続した結果として確認されたものである。

また、子どもにとっては「来てもよい場所がある」という感覚が生活の土台となり、滞在時間や関わり方が徐々に変化していく様子が見られた。こうした質的な変化は数値化しにくい一方で、令和7年度の約7か月間で延べ1,000名を超える利用実績、6割を超えるリピート率という客観的な数値は、本事業が一過性ではなく、日常的なセーフティネットとして機能してきたことを示している。

本報告は、法人設立以前における任意団体としての公式な年次報告であると同時に、今後の継続に向けた基礎資料として位置づけられる。本事業の意義は、支援をプログラムとして提供することではなく、思春期の子ども・若者にとって「評価されない日常」を地域の中に置き続けた点にある。支えられる経験が、やがて次の支援を生むという循環が、日常の中で立ち上がりつつあることを、本報告は記録している。

第1章 実践に至る背景

― 校内個別支援室での経験と、卒業後の「空白」への応答 ―

- 「卒業後も行ける場所がほしい」という声を受け止めたことから始まった
- 学校の外に場を置くという選択を重ねてきた
- 指導よりも、関係が途切れない状態を大切にしてきた

本事業は、地域福祉の理論や制度設計から構想されたものではない。出発点にあるのは、校内個別支援室の担当教員として、学校に来づらい生徒と日常的に向き合ってきた経験である。

校内個別支援室は、教室に入ることが難しい生徒が、学校とのつながりを完全に失わずに過ごすための場として設けられている。そこには、不登校、登校しぶり、対人不安、発達特性など、さまざまな背景を抱えた生徒が集まってきた。支援室での時間は、学習指導や目標達成を目的としたものではなく、評価や成果を求められない時間として積み重ねられてきた。

来室した子どもたちは、静かに本を読む日もあれば、机に伏せて過ごす日もあった。誰とも話さず、ただ同じ空間に居るだけの日も少なくなかった。しかし、その「何もしなくてよい時間」こそが、生徒にとって学校とつながり続けるための重要な拠り所となっていた。教室には入れなくても、学校の中に自分の居場所があるという感覚が、日常を支えていた。

そうした実践を重ねる中で、次第に強く意識するようになった問いがある。「この子たちは、中学を卒業したあと、どこへ行くのだろうか」という問いである。校内個別支援室という居場所は、中学校に在籍している3年間に限って制度的に保障されている。しかし、卒業と同時にその居場所は消える。高校に進学したとしても、同様の支援体制が用意されているとは限らず、進学しない場合や途中でつまづいた場合には、行き先はさらに見えにくくなる。

実際に、生徒たちから繰り返し投げかけられた言葉があった。「先生、卒業したら、もうここみたいな場所はないの。」「中学を出たあと、行ける場所って、どこかあるの。」その問いに対して、教員として明確な答えを持つことはできなかった。学校という制度の中で関われるのは、在籍期間に限られている。また、学びや進路については語れても、食事や居場所といった生活そのものに寄り添い続けることには限界があった。

こうした限界を前にしたある時、生徒自身の口から、はっきりとした願いが語られた。「中学を卒業したあとも、行ける場所をつくりたい」「自分たちが安心していられる場所が、学校の外にもほしい」。それは支援を求める訴えというよりも、自分たちの居場所を自分たちで守りたいという意思の表明として受け止められた。

その言葉をきっかけに、問いの向きが大きく変わった。「教員として、制度の中で何ができるか」ではなく、「学校の外に立つ一人の大人として、何を引き受けるのか」という問いである。学校の役割を否定するのではなく、学校では

担いきれなかった卒業後の空白と生活の領域を、地域の中で引き受けることはできないのか。その検討から構想されたのが、子どもカフェラウンジ マルカートである。

マルカートは、校内個別支援室の延長ではない。しかし、その根底には、支援室で共に過ごした時間と、生徒たちの「卒業後も続く居場所がほしい」という切実な声がある。本事業は、教員としての限界を自覚した一人の大人が、その限界の外側で、子どもたちとの約束を果たそうとしてきた実践である。その約束の先にある現在のマルカートには、かつての卒業生を含む高校生世代が深く関わり続けており、「卒業後も続く居場所」は、理念ではなく、確かな日常として動き始めている。

第2章 事業設計に込めた思想

— 「支援をする場」ではなく、「生き続けられる日常」をつくる —

- 来所理由を問わず、役割を先に課さない設計としてきた
- 食を、説明を必要としない日常の入口として位置付けた
- 評価よりも、まず安心があることを重視してきた

校内個別支援室での実践を重ねる中で、次第に一つの確信に近い感覚を持つようになった。学校に来づらい子どもたちにとって本当に必要なのは、特別な支援プログラムや手厚い指導ではなく、評価されず、役割を求められず、ただ存在していてよい日常なのではないか、という感覚である。

学校という制度は、子どもを守り、育てるために多くの機能を備えている一方で、「できる・できない」「来られる・来られない」といった2分法を内包している。支援という言葉が用いられる場面でさえ、課題が整理され、目標が設定され、改善が求められることが多い。その過程そのものが、すでに疲れ切っている子どもにとって、新たな緊張や負荷となってしまう場面を、校内個別支援室の現場で幾度も目にしてきた。

支援室に通っていた生徒の多くは、「頑張ること」に疲れていた。何かができるようになることや、前に進むことを求められる以前に、まずは立ち止まる時間が必要だった。何もしなくてよい時間、誰にも評価されない時間があったのはじめて、学校とのつながりをかろうじて保っている姿があった。その実感は、学校の外に居場所を構想するうえで、事業設計の出発点となった。

そこでマルカートでは、「支援を受けに来る場所」という位置づけを意図的に避けている。困っているから来る、という必要はない。目標や理由がなくても来てよい。その代わり、来た人が「ここにいても大丈夫だ」と感じられる「空気」を、何よりも大切にしてきた。この方針は、事業の効率や成果を高めるためのものではなく、生活に寄り添う場であり続けるために、どうしても外せない前提である。

平日毎日、7時30分から19時30分まで開設している理由も、この感覚と深く結びついている。支援を必要とする状態にある子どもほど、生活のリズムは不安定になりやすい。決まった曜日や時間に合わせることで、大きな負担となる場合も少なくない。そのため、「いつでも開いている」という事実そのものが、心理的なハードルを下げる役割を果たしてきた。令和7年6月の開設以降、欠損なく平日毎日の運営を続けてきた背景には、この約束だけは崩さないという意識があった。

また、マルカートでは参加や関わりを強制しない。食事だけをとって帰ってもよい。誰とも話さずに過ごしてもよい。途中で帰ることも、当然の選択肢として認めている。この柔軟さは、運営の側から見れば非効率に映ることもあるが、生活に寄り添う場である以上、欠かすことのできない条件であった。

食を事業の中心に据えたのも、同じ理由からである。食事は、日常生活の中の当然の営みであり、特別な説明や同意を必要としない。子ども食堂で食卓を囲むことで、子どもも若者もスタッフの大人も、同じ時間を自然に共有することができる。そこには指導も治療もなく、ただ日常が流れている。夕食時には10名を超える子どもたちが集う日も増え、にぎやかな食卓そのものが、この場の日常風景として定着しつつある。

本事業の設計は、「何を提供するか」を積み上げる形ではなく、「何を求めないか」「何を課さないか」を丁寧に削ぎ落とすことで形づくられてきた。評価しないこと、役割を固定しないこと、成果を急がないこと。その積み重ねが、マルカートという場の空気をつくり、次章以降で述べる支援の循環が立ち上がっていく土台となっている。

(誰とも話さずに過ごしてもよい——“滞在”を許す空気)



第3章 実践の中で見えてきた原理

— 高校生を媒介として、支援が循環し始める理由 —

- 高校生の関与は、安心が重なった結果として立ち上がってきた
- 支えられる側／支える側が固定されない関係を保ってきた
- その往還が、場の継続力＝循環のエンジンになった

マルカートの運営を始めた当初、高校生を「支援の担い手」として明確に位置づけていたわけではなかった。校内個別支援室を卒業した後も、安心して通い続けられる居場所として、高校生世代が自然に関われる場であることを想定していたにすぎない。役割や責任をあらかじめ与えることは、本事業の設計思想とも相容れなかった。

しかし、実践を重ねる中で、想定していなかった変化が繰り返し現れるようになった。それは、支えられていたはずの高校生が、いつの間にか場を支える側に回っているという変化である。調理を手伝う、配膳を担う、年下の子どもに声をかける。そうした行動は、誰かに求められたものではなく、役割として割り当てられたものでもなかった。それでも、日常の中で自然に引き受けられていった。

現在、運営に深く関わっている高校生は12名に達し、日々の現場では平均して2～3名が調理や配膳、片付けを担っている。彼らは「スタッフ」として固定されているわけではなく、利用者として来た日もあれば、自然に手伝いに回る日もある。その関わり方は一様ではなく、その日の状態や気分に応じて揺れ動いている。この揺らぎが保たれていること自体が、場の安心につながっているように見えてきた。

こうした変化を見続ける中で、一つの原理が浮かび上がってきた。支援が循環し始めるのは、「育てよう」としたときではなく、「安心」が先に十分に確保されたときである。評価されず、急かされず、失敗しても関係が切れないという感覚が先にあることで、人は初めて他者に目を向ける余裕を持つ。その余白の中で、「手伝ってみよう」「声をかけてみよう」という行動が、自然に立ち上がってくる。

高校生という存在は、この循環において特異な位置にある。大人ほど完成されておらず、年下の子どもほど守られる存在でもない。支えられる側と支える側の両方を、同時に生きている世代である。この不安定さが、結果として循環の媒介となっているように見えてきた。年下の子どもにとって、高校生は「少し先の未来」として具体的に想像できる存在であり、大人の言葉よりも現実味を持って受け取られている。一方で、高校生自身も、かつて支えられてきた経験を持っているからこそ、他者の戸惑いや不安に敏感でいられる。

印象的な場面がある。人前で話すことが苦手で、当初は調理場の端で黙って作業していた高校生が、ある日、年下の子どもに向かって「そこ、熱いから気をつけてね」と声をかけた。その一言をきっかけに、別の高校生も自然に関わり始め、場の空気が少し和らいだ。その変化は、指導の成果でも、事前に描いた成長モデルの結果でもなかった。ただ、安心できる日常が続いていた中で、起きた出来事であった。

こうした循環は、高校生と子どもの間だけで完結しているわけではない。高校生が主体的に関わる姿が地域に可視化されることで、支援の形も変化してきた。「支援してあげる」という関係ではなく、「この場が続いてほしいから関わる」という動機で、食材提供や協力が寄せられるようになっている。地域の方から届けられた米や野菜が、高校生の手によって調理され、再び子どもたちの食卓に並ぶ。その一連の流れそのものが、支援の循環を具体的な日常として示している。

子どもカフェラウンジ マルカートにおける支援の循環構造

(子ども・高校生・地域が役割を変えながら関わり続ける)

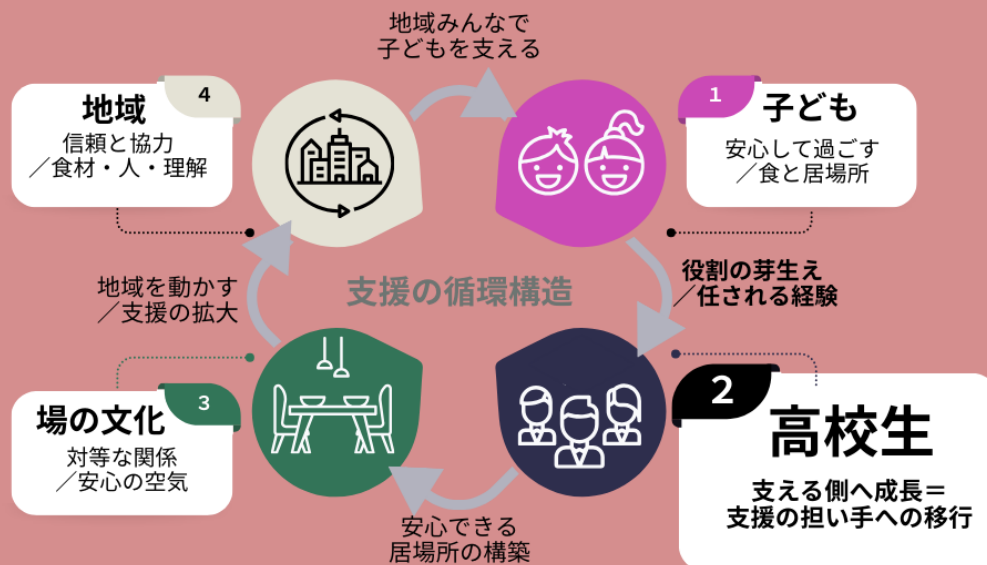


図 子どもカフェラウンジ マルカートにおける支援の循環構造

上図は、マルカートの日常の中で繰り返し観察されてきた関係性を、あとから整理したものである。中心にあるのは、評価や役割を求められない「日常としての居場所」であり、その周囲で、子ども、高校生、地域、大人が一方向ではない関係性を結んでいる。重要なのは、この循環が、あらかじめ設計されたモデルではなく、日常を積み重ねる中で結果として立ち上がってきた点にある。

マルカートにおける支援の循環は、理想として描かれた構造ではない。生活に寄り添う場をつくった結果として、現場で起き続けている現象である。本事業は、この循環が生まれる条件を、日々の実践の中で確かめながら、場を続けてきた。

第4章 事業の実施を通して見えてきた変化

— 子ども・若者・地域の日常に起きていたこと —

- 160日の開所は「今日も開いている」という積み重ねである
- 滞在の自由が、関係への再接続を「日常」として可能にしてきた
- 地域は「支援者」という立場を超えて関わり始めている

本章では、令和7年度の実践を通して、マルカートという場の中で日常的に観察されてきた変化を整理する。本事業における成果は、短期間で測定可能な数値によって把握できるものに限られない。むしろ、日々の関わりの積み重ねの中で、子どもや若者の過ごし方、場の空気、人と人との距離感がどのように変化していったのかという点にこそ、その特徴が表れている。

以下では、現場で繰り返し観察されてきた具体的な姿を軸に、子ども、高校生、場、地域それぞれに生じていた変化を記述する。

4-1 子どもに生じた変化

— 「来てもよい場所」が、生活の中に組み込まれていく —

マルカートを利用する子どもたちにとって、最も大きな変化は、「行ってもよい場所がある」という感覚が、生活の一部として定着していったことであった。開設当初は、食事のみを目的として短時間立ち寄る利用が多く見られたが、日を追うごとに、滞在時間が少しずつ延び、場の雰囲気や周囲の人の動きに目を向ける様子が増えていった。

特に、学校に通いづらさを抱えている子どもにとって、時間や参加を強制されない空間は、心理的な安全基地として機能していた。「今日ご飯だけ」「今日は少しだけ座ってみる」といった選択が否定されないことで、自分の状態に合わせた関わり方を、自分で決められるようになっていった。

ある小学生は、最初の数週間、夕食を食べ終わるとすぐに帰っていた。食後は目を合わせることも少なく、周囲の会話から距離を取っていた。しかし、ある日を境に、席を立たず、高校生が調理場で作業する様子をじっと眺めるようになった。数日後、その子は自分から「これ、手伝っていい？」と声をかけ、皿を運ぶ役割を引き受けた。それ以降、その子の滞在時間は、特に意識されることもなく自然に延びていった。

この変化は、何かを促した結果ではない。安心して過ごせる日常が、変わらずそこにあり続けた結果として生じていた。



(来所理由を問わず、子どもが自分のペースで過ごす時間)

4-2 高校生に生じた変化

— 支えられる側から、自然に支える側へ —

本事業において特に顕著であったのは、高校生世代に生じた変化である。高校生は当初、居場所の利用者として関わっていたが、日常の積み重ねの中で、次第に場を支える側へと移行していった。

調理補助や配膳、片付けといった作業を、頼まれなくても手伝うようになり、やがて年下の子どもへの声かけや見守りを自然に担うようになっていった。これらの行動は、役割として与えられたものではなく、評価や指示を伴わない関係性の中で、自発的に立ち上がってきたものであった。人前で話すことが苦手な、当初は黙々と作業していた高校生が、ある日、年下の子どもに向かって「ここ、座っていいよ」と声をかけた場面がある。その一言をきっかけに、別の高校生も自然に関わり始め、場の空気がやわらいた。

高校生自身にとって、こうした経験は「役に立っている」という実感につながり、自己肯定感が静かに回復していく様子が見えてきた。

4-3 場の文化として生じた変化

— 支援が一方向に流れない空気の形成 —

子どもと高校生の関係性が変化することで、マルカートという場そのものの文化にも、少しずつ変化が生じてきた。支援が大人から子どもへ一方向に流れるのではなく、年齢や立場を越えて横に広がり、次の誰かへと手渡されていく空気が、日常の中で育まれていった。

大きな声や過度な干渉が自然と抑制され、初めて来た子どもに対しても、距離感を配慮した関わりが見られるようになった。これらはルールとして定めたものではなく、思春期の子どもや若者が多く集う場として、互いの状態を尊重する文化が、日常の積み重ねの中で形づくられてきた結果である。

高校生が年下の子どもを見守る一方で、疲れが見える高校生に対しては、地域ボランティアが声をかけ、作業を代わるといった場面も日常的に見られるようになった。

支援される側と支える側が固定されず、状況に応じて役割が入れ替わることが、場の安定につながっていた。



(支えられる側と支える側が固定されない、日常の見守り)



（支える／支えられるが入れ替わる、場の文化としての共同）

4-4 地域との関係に生じた変化

— 若者の姿が可視化されることで広がった信頼 —

高校生や思春期の子どもたちが日常的に場に関わる姿が地域に可視化されたことで、地域住民や事業者との関係にも変化が生じてきた。食材提供や協力の申し出は、「困っている人を助ける」という構図ではなく、「この場が続いてほしいから関わる」という形へと変わっていった。

高校生スタッフの活動を見た地域事業者が、「若い人たちが関わっているなら」と食材提供を申し出た事例もある。その食材が高校生の手によって調理され、再び子どもたちの食卓に並ぶことで、地域からの関わりは具体的な「一皿」として還元されていった。

こうした関係の積み重ねによって、マルカートは特定の支援対象のための場ではなく、地域の中に自然に存在する日常の場として認識され始めている。

4-5 数値として確認されている状況

令和7年6月の開設から1月末までの約7か月間において、子どもの延べ利用者数は1,000名を超え、朝食提供総数（スタッフを含め）は1,600食、開所日数は160日に達している。利用リピート率は6割を超えており、特定の子どもや若者にとって、必要なときに戻ってこられる場所として機能し始めている様子がうかがえる。

ただし、これらの数値は成果そのものを示すものではなく、日常としての居場所が継続して利用されている状況を補足的に示す指標として位置づけている。

第5章 実践を通して浮かび上がった課題と対応

— 支援の循環を保つために重ねてきた判断 —

- 支えすぎや固定化、高校生への過負荷などの懸念と向き合い続けている
- 解決を急がず、関係を切らない判断＝揺らぎとして抱える判断を続けた
- 原点（評価を急がない／日常を守る）に立ち返っている

マルカートの実践は、あらかじめ完成形を描いて進められてきたものではない。日常に寄り添う場をつくるという方向性は定めていたものの、現場では想定外の出来事が繰り返し起こり、その都度、判断を迫られてきた。課題は、計画段階で予測できたものよりも、むしろ「場が機能し始めたからこそ」立ち上がってきたものが多かった。こうした課題に対し、大人の判断で解決させるのではなく、高校生を含め運営側のみんなで、夜にミーティングを開き、話し合っ

て解決策の検討を進めていった。

本章では、実践を進める中で浮かび上がってきた主な課題と、それに対して現時点で選び取ってきた判断について整理する。

5-1 「支えすぎてしまう」ことへの戸惑い

生活に近い場を日常的に開く中で、常に意識せざるを得なかったのが、「支えすぎてしまうのではないか」という問いであった。安心できる場が見つかったことで、ほぼ毎日来所する子どもや若者も現れた。特に、学校や家庭で居場所を感じにくかった子どもにとって、マルカートは数少ない拠り所となっていた。

ある中学生は、夕方になるとほぼ毎日のようにマルカートを訪れ、決まった席で静かに過ごしていた。大きな困りごとが表に出ているわけではないが、ここ以外に行く場所が見当たらない様子でもあった。その姿を前に、「この関係が、この子の自立を妨げてしまわないだろうか」という迷いが、運営側の中に生じた。

この課題に対して、本事業では利用頻度や関わり方を制限する方向は取らなかった。代わりに意識してきたのは、「誰かが常に支える側にならない」関係性を保つことである。子どもと大人、高校生と年下の子どもといった関係が固定化されないよう、場の中で役割が自然に揺れ動く状態を大切にしてきた。

5-2 高校生に責任を背負わせすぎないための線引き

高校生が場の運営に深く関わるようになるにつれ、「どこまで任せてよいのか」という新たな課題も生じた。主体性を尊重するあまり、知らず知らずのうちに責任まで背負わせてしまう危険があった。

調理や配膳を担う高校生の中には、「失敗したらどうしよう」と不安を口にする者もいた。その際、マルカートでは「任せること」と「責任を引き受けること」を意識的に切り分けてきた。作業には関わってもらうが、最終的な判断や

責任は必ず大人が引き受ける。失敗が起きた場合も、それを個人の問題として扱わない。この線引きを繰り返し確認することで、高校生は安心して関わり続けることができる。

高校生にとって重要なのは、役に立つ経験そのものよりも、「失敗しても関係が切れない」という感覚である。その前提を守ることが、支援の循環を持続させる条件となっている。

5-3 常設型運営に伴う負担との向き合い方

平日毎日開設する常設型の居場所は、子どもや若者にとって大きな安心材料である一方、運営側には相応の負担を伴う。人員の確保、食材の調達、衛生管理、光熱費や消耗品の管理など、日常的な業務は多岐にわたる。

実際、開設から7か月間で160日間（朝晩＋長期休業中の昼食で計350回）の開設を支えるために、多くのスタッフやボランティアが現場に関わってきた。すべてを整えようとすれば、継続そのものが難しくなる。そのため本事業では、「完璧な運営」を目指さないという判断を重ねてきた。安全と安心に関わる最低限の条件を守り、それ以外は状況に応じて柔軟に対応する。この姿勢が、結果として運営の持続につながっている。

5-4 成果を数値化しにくいことへの向き合い方

マルカートの実践で生じている変化の多くは、数値だけでは捉えきれない。安心感の醸成や関係性の変化といった成果は、外部から見えにくく、説明が難しい側面を持っている。

この点について、無理にすべてを数値化するのではなく、日常の変化を言葉として記録し続けることを重視してきた。その一方で、延べ1,600食の提供という利用実績や、6割を超えるリピート率といった数値は、「また来たい」と感じられる日常が成立していることを補足的に示す事実として位置づけている。

5-5 課題を「揺らぎ」として抱え続けるという選択

以上の課題はいずれも、現時点で解消されたものではない。しかし本事業では、これらを早急に解決すべき欠点として処理するのではなく、実践に伴う揺らぎとして抱え続けるという選択をしている。

揺らぎがあるからこそ、場は硬直せず、関係性は更新され続ける。マルカートは完成を目指す事業ではなく、問いを持ちながら続いていく実践である。その姿勢そのものが、支援の循環を支えている。

第6章 事業の社会的意義と公共性

— 制度の外に置かれた「日常」が地域にもたらしたもの —

- 制度の外にあることで、無条件に関われる日常が成立している
- 支援プログラムではなく、生活の場として機能している
- 居場所は地域の中で静かに公共性を帯びつつある

本事業は、行政施策や既存制度の代替を目的とするものではない。一方で、制度の内側だけでは十分に担いきれなかった思春期の子ども・若者の日常に対し、制度の外から継続的に応答してきた実践である。本章では、その実践が結果としてどのような公共的機能を果たしてきたのかを明らかにする。

6-1 「制度の外」に位置することが生んだ公共性

マルカートは、学校や福祉制度、行政事業といった既存の制度の枠組みの中でではなく、あえて制度の外に位置する任意団体の取り組みとして立ち上げられた。

制度の内側にある支援は、対象年齢、在籍状況、利用条件、目的などが明確に定められている。それは多くの人を公平に支えるために不可欠な仕組みである一方、思春期の子ども・若者にとっては、「条件を満たさなければ利用できない」「支援対象として扱われること自体が負担になる」という側面を持つことも少なくない。

マルカートでは、利用にあたって理由や背景を問わないことを原則とし、「困っているから来る場所」ではなく、「**来てもよい日常の一部**」として場を開いてきた。この姿勢は、制度から距離を置くことによって、結果的に制度では拾いきれなかった層との接点を生み出している。制度の外にあるからこそ、評価や手続きを伴わない関係性が成立し、そのこと自体が思春期世代にとっての心理的な安全性を高めていた。

6-2 思春期世代に特化した居場所が持つ社会的意味

小学校高学年から高校卒業相当年齢までの思春期世代は、乳幼児期や学童期と比べ、地域の中で居場所の選択肢が急激に減少する年代である。学校生活が中心となる一方で、学校につまずいた場合、その代替となる場は非常に限られている。

マルカートは、この思春期世代に特化し、「一人で来て、一人で過ごしてもよい」「誰とも話さなくてもよい」という前提を持つ居場所を、常設型として地域の中に置いてきた。これは、特定の困難を抱える子どもだけを対象とした支援ではなく、思春期という発達段階そのものに応答した実践である。

実際に、利用する子どもたちの多くは、明確な支援ニーズを言語化して来ているわけではない。「家にいてもしんどい」「なんとなく寄れる場所がほしい」といった曖昧な理由で足を運び、日常の中で少しずつ関係を紡いでいる。このような場が地域に存在すること自体が、思春期世代の孤立を未然に防ぐ、予防的な社会的機能を果たしている。

6-3 「支援」ではなく「日常」を差し出すという公共性

本事業が一貫して大切にしてきたのは、支援プログラムや指導を提供することではなく、日常そのものを地域の中に確保し続けることであった。

日常は本来、誰かに評価されるものでも、成果を示すものでもない。しかし、学校に通えない、家庭に居づらい、あるいは外部との接点を失った思春期の子ども・若者にとって、日常は非常に脆弱なものとなる。

マルカートが提供してきたのは、「何かをしなくても時間が流れる場所」「失敗

しても関係が切れない空間」である。食事をともにすること、同じ場所で過ごすこと、また来てほしいと思えること。その積み重ねが、子どもや若者にとっての生活の基盤となっていた。

こうした日常の保障は、短期的な成果としては測定しにくい。しかし、孤立や二次的な困難を防ぐという点において、明確な公共性を持つ取り組みである。

6-4 若者を固定化しない関係性が生んだ公共的循環

マルカートでは、高校生および高校卒業相当年齢の若者が、場の中で重要な存在となっていたが、それを「担い手」や「人材」として制度化することは意図的に行ってこなかった。

支えられる側であることも、支える側であることも、どちらかに固定しない。その柔軟さが、若者自身の主体性を損なわず、長期的な関与を可能にしてきた。

実際に、支えられていた高校生が、自然に年下の子どもへ声をかけ、場を支える側へと移行する姿は、日常の中で繰り返し見られている。この循環は、育成や指導の成果ではなく、安心できる日常が先に存在した結果として立ち上がってきたものである。

このような若者の姿が地域に可視化されることで、「若者＝支援される存在」という一方向的な見方が緩み、世代間の信頼関係が育まれていった。

6-5 地域とともに成立する公共性

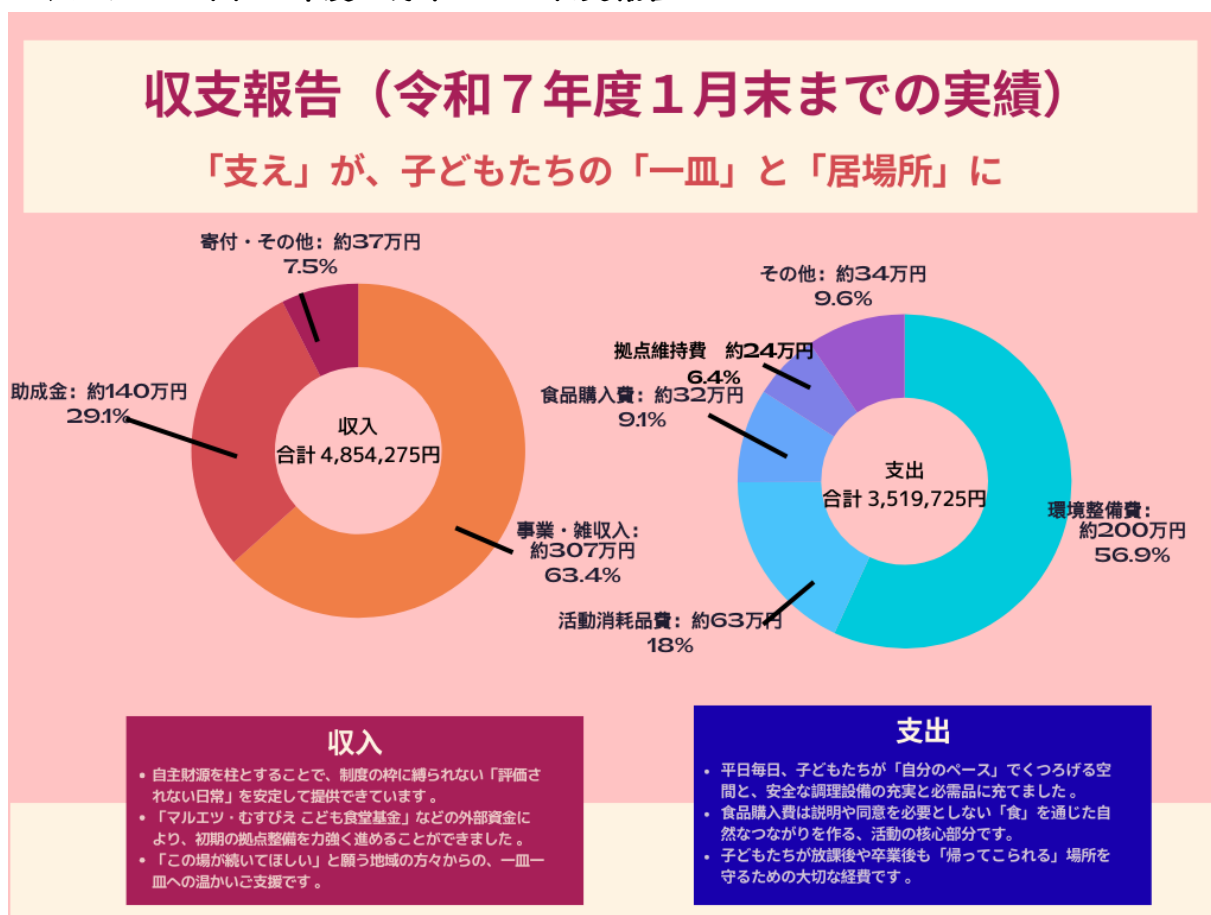
本事業は、特定の個人や組織だけで成り立っているものではない。ご近所からの継続的な食材提供や個人からの寄付、各企業による助成金（第3回「マルエツ・むすびえ こども食堂基金 mini」〔株式会社マルエツ／認定NPO 法人 全国こども食堂支援センター・むすびえ〕を含む7つの企業による助成をいただいた。）、ならびに神奈川県、相模原市や、市社会福祉協議会からの補助金や事業費によって支えられ、はじめて日常として成立している。

重要なのは、これらの支援が「困っている人を助ける」という一方向の関係ではなく、「この場が続いてほしいから関わる」という形で広がっている点である。地域の人々や企業、団体が、子どもや若者の姿を日常的に目にすることで、マルカートは特定の支援対象のための場所ではなく、地域の中に自然に存在する公共的な場として認識され始めている。



（食堂の外で、地域の方々との共同作業～山芋掘り）

◆グラフ：令和7年度1月末までの収支報告



【収入】 合計 4,854,275 円（1 月末時点）

収入構成は、本事業が自主財源を基盤としつつ、外部助成および地域からの寄付によって支えられていることを示している。

・ 事業・雑収入（63.4%）

自主財源を柱とすることで、制度的枠組みに依拠しすぎない形で、継続的な運営基盤を確保している。

・ 助成金（29.1%）

「マルエツ・むすびえ こども食堂基金」等の外部資金により、拠点整備および初期環境の充実を図った。

・ 寄付金・その他（7.5%）

地域住民および関係者からの支援によって構成されており、本事業が地域との関係性の中で成立していることを示している。

【支出】合計 3,519,725 円（1 月末時点）

支出の内訳は、「支援プログラム」の実施よりも、安心して過ごせる日常環境の維持に重点を置いた構成となっている。

- ・ 環境整備費（56.9%）

※備品・修繕費の合計。

子どもが自らのペースで滞在できる空間整備および安全な調理環境の確保に充当した。

- ・ 活動消耗品費（18.0%）

平日毎日の開設を維持するための消耗品および生活関連物品に使用した。

- ・ 食生活支援費（9.1%）

※食品購入費。

食事提供を通じた日常的関係形成の基盤として活用した。

- ・ 拠点維持費（6.4%）

施設賃料等、拠点機能を継続的に確保するための経費である。

- ・ その他（9.6%）

光熱費、事務費、交流活動費等、運営基盤の維持に関わる支出である。

第 7 章 地域実践と政策とのあいだで

— 本事業が置かれている位置について —

- | |
|---|
| <ul style="list-style-type: none">・ 政策実装が目的ではないが、結果として理念と重なっている・ 「切れ目ない支援」を生活の側から体現している・ 支援の循環は、高校生にとって“役割を押し付けないキャリア形成”として立ち上がっている |
|---|

本章では、本事業を相模原市の不登校対策や教育施策との関係の中で整理する。

相模原市は、不登校総合対策実行計画において、「多様な学びの場の整備」および「切れ目ない支援体制の構築」を掲げている。本事業は当初、それらの政策実装を目的として開始されたものではない。しかし、実践を重ねる中で、その理念と重なり合う部分が少なくないことが見えてきた。

7-1 卒業後の空白への応答

校内個別支援室での経験から明らかであったのは、中学卒業と同時に居場所が失われる現実であった。

制度内では在籍期間が支援の単位となるが、生活は卒業によって区切られるも

のではない。マルカートは、平日毎日開設という形で、その時間の断絶に向き合ってきた。

この継続性は、結果として「切れ目ない支援」という政策課題と接点を持つものとなっている。

7-2 多様な学びの場としての生活実践

市計画においては「多様な学びの場」が示されている。

本事業における学びは、特別なプログラムとして設計されたものではない。食事とともにし、準備や片付けを分担し、声をかけ合う日常の中で、役割が自然に立ち上がっていく。

高校生が支えられる側から支える側へと移行していく循環は、評価や指導の枠組みとは異なる形で生じたものである。

それは、生活の中に埋め込まれた学びであり、関係性を通じて形成される経験である。

7-3 キャリア教育の問いの延長として

代表は中学校において長年キャリア教育を担当してきた。

学校で語られるキャリア教育は、進路や職業観に焦点が当たることが多い。しかし、現場で繰り返し問われてきたのは、「自分が誰かの役に立てると感じられる経験を持てているか」という、より基礎的な問いであった。

マルカートで確認されてきた循環は、その問いの延長線上にある。

高校生が自然に役割を引き受けるようになる姿は、指導の成果としてではなく、安心が先に確保された結果として生じている。

本事業は、制度内教育で抱えてきた問いを、地域の日常の中で続けている実践とも言える。

7-4 制度と地域のあいだに立つ実践

本事業は、制度を補完することを目的としているわけではない。

しかし、制度と家庭のあいだに生じる時間や空間を引き受ける実践として、結果的にそのあいだに位置している。

食を媒介とした日常の継続は、子ども・高校生・地域が役割を変えながら関わり続ける構造を生み出してきた。

それがどこまで政策と接続しているかを断定することはできない。ただ、本事業が掲げられている理念と、実践の方向性が重なり合っていることは確かである。

第8章 今後の課題と事業の展望

— 「広げる」のではなく、「続ける」ための選択 —

- 拡大より、日常の継続を優先する
- 法人化後も、設計思想は変えない
- 続いていること自体が、次の関係を生む基盤である

本章では、第4章から第6章までで整理してきた成果、課題、社会的意義を踏まえ、子どもカフェラウンジ マルカートを今後どのように継続し、引き継いでいくのかという視点から、事業の展望を整理する。本事業は、短期間で成果を示したり、規模を拡大したりすることを目的として始められたものではない。一方で、日常としての居場所が地域に定着し始めた現在、「この場をどのように守り、続けていくのか」という問いに、実践者として向き合う段階に入っている。

令和8年度に向けた基本的な考え方は、これまでの実践を大きく変えることではない。マルカートが大切にしてきたのは、思春期の子ども・若者が、評価や役割を課されることなく、日常として通い続けられる居場所を地域の中に置き続けることである。そのため、対象年齢を小学校5年生以上から高校卒業相当年齢までとすること、平日毎日開設する常設型であること、食を中心とした日常的な関わりを軸とすることといった基本的な枠組みは、次年度においても維持する方針としている。新たなプログラムを増やすことよりも、これまで積み重ねてきた日常が、無理なく、安定して続いていくことを最優先に考えている。

一方で、実践を重ねる中で、「続けるための条件」を意識的に整える必要性も明らかになってきた。常設型の居場所は、子どもや若者にとって大きな安心をもたらす反面、運営側には継続的な負担がかかる。立ち上げ期においては、代表や限られた大人の献身に支えられてきた側面も否定できないが、この形を長期的に続けることは現実的ではない。今後は、関わる大人の役割を整理し、無理のない関わり方を共有することで、「特定の人が頑張り続けなければ成り立たない場」から、「関わる人が入れ替わっても続いていく場」へと移行していく必要がある。

また、思春期の子どもや若者と日常的に関わる場であるからこそ、「支えすぎない距離」を場として守り続けることも重要な課題である。善意から関わりが深まりすぎてしまうことは、場にとっても、関わる側にとっても負担となり得る。次年度に向けては、個々の感覚に委ねるのではなく、大人同士が判断に迷ったときに立ち止まり、振り返ることができる関係性を意識的に育てていく必要がある。

本事業の特徴である「高校生を媒介とした支援の循環」についても、次の段階を見据えた視点が求められている。これまで、この循環は特定の仕組みや育成プログラムによって生み出されたものではなく、日常の中で自然に立ち上がってきたものであった。しかし、高校生は卒業や進学、就職といったライフステージの変化によって、必ず場を離れる時期を迎える。この循環を一過性のもの

に終わらせないためには、「誰かが頑張った結果」としてではなく、関係性の文化として引き継がれていく必要がある。マルカートでは、今後も「教える」「育てる」といった枠組みに頼らず、先に関わっている高校生の姿そのものが次の世代に伝わっていく関係性を大切にしていく。

こうした課題を総合的に検討した結果、事業を任意団体のまま継続していくことには構造的な限界があるとの判断に至った。資金管理や契約関係の不安定さ、責任の所在の曖昧さ、長期的な事業計画の立てにくさといった点は、日常としての居場所を守り続けるうえで無視できない要素である。そのため、令和8年4月1日を設立日として、特定非営利活動法人として法人化することを決定した。この判断は、事業を拡大するためのものではなく、これまで積み重ねてきた日常を壊さず、無理なく続けていくための基盤を整えるための選択である。

法人化によって組織の形は変わるが、マルカートという場の姿勢を変えることは意図していない。利用する理由や背景を問わないこと、役割や成果を子ども・若者に求めないこと、「今日は来ない」という選択も尊重されることといった基本的な考え方は、今後も守り続けていく。法人化は管理や統制を強めるためのものではなく、関係性の柔らかさや立ち止まる余白を守るための土台づくりである。

第9章 おわりに

— 支えられる経験が、次の支援を生むために —

- 居場所に完成形はない
- 「また来てもよい」と思える状態、評価されない日常を守り続ける
- その積み重ねの中で、支援は循環していく

本報告書で整理してきた子どもカフェラウンジ マルカートの実践は、特別な成功事例でも、完成されたモデルでもない。誰かが劇的に変わったわけでも、課題がすべて解決されたわけでもなく、ただ「今日もここに来てよい」「ここにいても大丈夫だ」と感じられる日常が、静かに積み重なってきたにすぎない。

しかし、その「にすぎない」日常が、思春期の子どもや若者にとっては決定的な意味を持つ場面が、現場では繰り返し生まれてきた。学校に行けなかった日、家に居場所を感じられなかった日、誰とも話したくなかった日。そうした日の延長線上に、理由を問われず迎え入れられる場所があることは、生きることを続けるための確かな支えになっていた。

たとえば、最初は食事だけをとり足早に帰っていた子どもが、数週間後には席を立たずに高校生の手元を眺めるようになり、ある日ぽつりと「これ、手伝ってもいい？」と声をかけたことがあった。その一言は、何かを教えた結果でも、背中を押した成果でもない。何もしなくてもよい時間が続いた先に、関わ

りが自然に立ち上がったただけだ。

私は長く学校現場に身を置き、子どもと向き合う時間の尊さと同時に、制度としての学校が抱える限界も実感してきた。中学3年間という限られた関係、卒業とともに切れてしまうつながり、生活そのものには手が届かないもどかしさ。校内個別支援室での経験は、どうしても埋められない「卒業後の空白」があることを、何度も突きつけてきた。

マルカートは、その空白に対する一つの応答となっている。学校の代わりでも、正解でも、完成形でもない。ただ、「中学を卒業したあとも行ける場所がほしい」という子どもたちの声を、見なかったことにしないために生まれた場だ。

この場で印象的なのは、支援が一方向に流れないことだ。最初は支えられていた高校生が、いつの間にか年下の子どもに声をかけ、場を支える側に回っていく。その姿を見て、別の誰かがまた関わり始める。そこには「支援している／支援されている」という言葉だけでは捉えきれない関係性がある。

支えられる経験は、人を弱くしない。むしろ、「次は自分が誰かを気にかけてみよう」という気持ちを静かに育てていく。マルカートで起きている支援の循環は、教育や福祉の理論から設計されたものというより、安心して生きる日常の延長線上で、自然に立ち上がってきたものだと考えている。

本事業は、完成を目指す取り組みではない。思春期の子どもや若者の状況は常に変化し、それに伴って居場所に求められる距離感や役割も揺れ動く。だからこそ、「これで正しい」と言い切るより、違和感を手がかりに立ち止まり、問い直し続ける姿勢をこれまで大切にしてきたし、これからもより大切にしていかなければならない。

任意団体としての最終年度を終え、法人化という次の段階へ進むことは、一つの区切りであると同時に通過点でもある。組織の形が変わっても、関係性の柔らかさや、失敗しても関係が切れない空気を失わないことが、これからの要となる。「未来への一皿」という団体名には、一度きりの支援や特別な出来事ではなく、日常の積み重ねが未来をつくるという思いが込められている。誰かと同じ時間にご飯を食べること。同じ場所に居合わせること。また来てもよいと思えること。その一つひとつが、子どもや若者の未来を支える土台になっていく。



(高校生主体の定例理事会の風景)

マルカートは今後も揺らぎ続けるだろう。運営の課題も迷いも簡単には消えない。それでも、「今日も開いている」「また来られる」という状態を愚直に守り続けたい。その積み重ねの先にしか、支援が循環する文化は生まれない。

あとがき（自評）

本報告書は、子どもカフェラウンジ マルカートの実践を「成果」として提示することを目的に編まれたものではありません。この冊子は、評価や役割を先に置かず日常を開き続けるという選択が、どのような関係性を生み、どのような揺らぎを伴いながら継続されてきたのかを、可能な限り事実即して記録することを意図して作成したものです。マルカートの実践は、あらかじめ明確なモデルや完成形を想定して始まったものではありませんでした。校内個別支援室で関わってきた生徒たちから語られた「中学を卒業したあとも行ける場所がほしい」という言葉を前に、それをなかったことにしないため、学校の外に場を置くという選択をしました。その後の運営においても、「何を提供するか」よりも、「何を求めないか」を判断の基準としてきました。来所理由を問わないこと、参加を強制しないこと、役割や成果を課さないこと。これらは消極的な配慮ではなく、思春期世代が他者との関係に再び向き合うための前提条件であったと、現在では捉えています。

本報告で繰り返し取り上げてきた高校生世代の関与の在り方は、その象徴的な現れです。高校生を担い手として制度化することも、支援対象として囲い込むこともせず、支えられる側と支える側を往還する存在として関わり続けられる状態を維持してきました。その結果として立ち上がった行為や関係性は、育成の成果というよりも、安心が十分に保障された日常の中で生じたものだと考えています。

また、食を事業の中心に据えながらも、それを「支援」として前景化しなかった点についても、本実践の重要な特徴であると認識しています。食事は説明や同意を必要としない日常行為であり、支援対象であることを意識させない関係性を可能にします。そのことが、場への関与を一過性のものにとどめず、生活の一部として位置づける条件となってきました。

一方で、本実践は常に順調であったわけではありません。支えすぎてしまっていないか、関係が固定化していないか、高校生に過度な責任を負わせていないか、常設型で開き続けること自体が無理になっていないか。こうした問いは、運営の過程で繰り返し生じてきました。これらに対して、明確な解決策を得られたという感覚は、現在もありません。ただし、その都度、「評価を急がないこと」「関係を切らないこと」「日常を途切れさせないこと」という原点に立ち返りながら、判断を重ねてきました。

助成金を活用して事業を行う以上、説明責任や成果の可視化は不可欠です。本報告においても、利用実績や開所回数などの数値を示しています。しかし、これらは因果的な成果を主張するためのものではなく、日常としての居場所が成立してきた状況を補足的に示す指標として位置づけています。数値化しきれない関係性の変化や安心の生成過程を、言葉として残すことこそが、本報告の中心的な目的でした。

また、この冊子は、「この実践を広げる」ための資料でもありません。「同じやり方を推奨する」ものでもありません。それぞれの現場が置かれている条件は異なり、居場所の在り方も一様ではありません。ただし、本報告が、各団体や実践者にとって、「自分たちは何を急ぎ、何を急がないのか」「何を評価し、何を評価しないのか」を改めて考えるための材料となるのであれば、それは望外の喜びです。

本実践は、特定の政策を実装することを目的として始まったものではありません。しかし、振り返ると、自治体が掲げる「多様な学びの場」や「切れ目ない支援」といった言葉と重なり合う部分も少なくないことに気づかされます。制度の外側に立つのではなく、その周縁で日常を引き受け続けることが、結果として何らかの接点を生み出しているのであれば、それは本実践の副次的な意味の一つかもしれません。

居場所づくりに正解はありません。しかし、評価や役割を先に置かず、「今日も開いていること」「また来てもよいと思えること」を愚直に積み重ねることが、結果として次の関係や支援を生み出していくことは、本実践を通して確かに実感してきました。本報告が、助成金の事例報告にとどまらず、制度と地域のあいだで実践を続ける者同士が問いを共有するための一資料として位置づけられることを願っています。

<後援・連携・助成>

後 援 相模原市

連 携 相模原市こども若者未来局

相模原市中央区役所<まちづくりセンター>

社会福祉法人 相模原市社会福祉協議会<中央ボランティアセンター>

中央中学校区学校運営協議会<マルカートより 3 名の役員が委員>

補助金 神奈川県子ども食堂応援事業 協力金交付

相模原市子ども食堂等物価高騰対策補助金交付

相模原市社会福祉協議会 子ども健やか育成事業 補助金交付

助 成 <令和 7 年度>

認定 NPO 法人 全国こども食堂支援センター・むすびえ

公益財団法人 オリックス宮内財団

公益財団法人 キューピーみらいたまご財団

医療法人社団 若葉堂

株式会社 ファミリーマート (むすびえ協賛事業)

株式会社 マルエツ (むすびえ協賛事業)

ウエインズ トヨタ 神奈川 株式会社

食材提供 公益社団法人フードバンクかながわ

認定 NPO 法人 全国こども食堂支援センター・むすびえ

コストコホールディングスジャパン

西武信用金庫

その他、地域の企業より提供、地域の方からの差し入れ

ご寄付 地域の方々より (賛助会員などを含める)

登 録 こども食堂ネットワーク (むすびえ 全国版)

神奈川こども食堂・地域食堂ネットワーク

全国食支援活動協力会

公益社団法人かながわ福祉サービス振興会

「子育て支援情報かながわ」

さがみはら SDGs パートナー

さがみはら市民活動サポートセンター

さがみはら地域ポータルサイト「相模原市 子どもの居場所」